

賛美のことば

水草修治

知性においても

讃美歌3

讃美歌・聖歌の歌詞を思いつくままに解説します。一九九三年に「みちしお」というキリスト教誌に連載されたものです。当時、私は大泉聖書教会の若い牧師でした。

「それでは、どうすればよいのでしょうか。私は霊で祈り、知性でも祈りましょう。霊で賛美し、知性でも賛美しましょう。」(第一コリント14・15)

目次

知性においても (讃美歌3)

賛美歌とはメロディを伴う祈りです。祈りであれば、知性がともなっていることが大切です。さ

さきわいたもう神のみいつ (讃美歌2)

もないと、主が戒められた「異邦人のように意味

命令でなく強調

もなく同じ言葉を繰り返す」呪文になってしまう

日々主と歩めば (聖歌467)

でしょう。ところで『讃美歌』や『聖歌』の歌詞

み使いらの声すなり (讃美歌111)

は文語体なので、現代人には少々むずかしい面が

もろびとこぞりての謎 (讃美歌112)

あります。たとえば讃美歌三番の一節と四節。

この人を見よ (讃美歌121)

一 あめつちのみ神をば

驚くばかりの恵み (聖歌229)

ほめまつれ人の子よ

いもせをちぎる (讃美歌430)

我が主のみとのこそ

聖なる聖なる聖なる (讃美歌65)

照り輝けいや栄えて

わが妻子も (讃美歌267)

4 ちりひじになりし身は

十字架のもとぞ (讃美歌262)

主に頼るほかぞなき

雨と涙と (讃美歌128)

代々変わらぬみ恵みや

【付録】

主は強ければ (讃美歌461)

我が御神よ我が父よ

感謝するの？しないの？

「あめつちのみ神」は「雨土の御神」でなく、

「天地の御神」です。「天地の創造主である神」ということです。「我が主のみとの」の「みとの」は「御殿」です。つまり、神のお住まいで、ここでは恐らく主が臨在される礼拝堂をイメージしているのでしょう。また「ちりひじになりし身」は、「塵と泥から成っている身」つまり、ヘブライ語で塵（アーダマー）から造られたアダムということとです。「地の塵からできた人は、主に頼るほかはありません。」ということとです。

また、難しさは用語だけでなく、文法にもありますが、少し知識を身につければ大丈夫です。一節に「我が主の御殿こそ照り輝け」とありますが、これは「神の御殿よ輝け」と命令しているのではなく、「こそ〜輝け（已然形）」で、係り結びという強調の表現ですから、「私たちの主の御殿は、すばらしく照り輝くよ」という意味です。こうしてみると少々面倒なようですが、賛美歌に出てくる程度の語彙と文法は、ごく限られていますから、少しばかり努力すればわかるようになります。

さきわいたもう

神のみいつ

讚美歌2

讚美歌がむずかしい理由の一つは、その用語が耳慣れないことです。讚美歌第二番はその代表選

手かもしれません。

1 いざやともに 声うちあげて

奇しきみわざ ほめうたわまし

造りまし あめつちみな

神によりて 喜びあり

2 母の胸に ありしときより

わがふむ道 さきわいたもう

今も後も 仇をふせぎ

世のわざわい 除きたまわん

3 迷いを去り やすきをあたえ

常にめぐみ なくさめたもう

父なる神 み子 御霊に

代々(よよ)みいつとみ栄えあれ

「うさぎおいしかの山」が「うさぎが美味の山」ではなく、「うさぎを追ったあの山」であるように、「つくりまし あめつち（天地）」は「お造りになった天地」という意味であり、「母の胸にありし時より」は「母の胸にいたときから」という意味です。つまり、「し」は過去の助動詞「き」の連体形です。

次に、「さきわいたもう」とは何でしょう。「さきわう」の語根は、「咲く」「栄える」「盛り」などと同じ sak で、成長の働きが頂点に達して、外に開くことを表すそうです（大野晋）。だから、「さきわう」とは幸せにするという意味です。二節は、私たちが赤ん坊のときから、神様は人生の旅路に花を咲かせ、栄えさせてくださることを感謝しています。

ところで、「みいつ」とはなんでしょう。三位一体、三一と誤解している方が結構いるようです。けれども、私の母に聞くと、「そんなの私らの世代なら誰でも知つとるよ」と言つて正解をさりとら言つてのけました。「みいつ（みいづ）」は非常に古い古語なのですが、明治維新の王政復古から敗戦まで国家神道でもてはやされたことがあるからです。『広辞苑』によれば、「みいつ（みいづ）」とは、「いつ」の尊敬語。天皇・神などの威光、強いご威勢・漢字では「御稜威」と書きます。なるほど、教育勅語・御真影・君が代で教育された世代には、忘れたくても忘れられない言葉でしょう。

命令でなく強調

係り結び

『讚美歌』で多用されている強調の言い回しに「係り結び」があります。

われらが主のみとこそ照り輝け(3:1)
そのみ栄えこそげにたぐいなければ(18:1)
こよなき励まし受くぞつれ一ぢ(20:2)
主にたよるほかぞなき(3:4)
み歌ぞ聞こゆる(15:5)
天より来べしとたれかは知る(15:3)

係り結びというのは文語で疑問や反語の意味を作る場合と、意味を強める場合に使われる言い回

しです。係り結びを作る助詞には「ぞ」「なん」「や」「か」「こそ」の五つがあり、「ぞ」「なん」「や」「か」は連体形で、「こそ」は已然形で結びます。「あ あ、そんなこと学生時代にきいたことあるなあ。」でしょう。もつとも、若干の「か」の反語の例を別にして賛美歌に頻出するのは、「ぞ」と「こそ」です。

上のクリスマスの賛美歌「ああベツレヘムよ『賛美歌』一一五番の三節「たれかは知る」は反語で、「だれが知つていようか、いや誰も知らない。」という意味になります。そして、「ぞ」と「こそ」は強調のためだけに用いられるので、「ぞ」「こそ」が出たら、「ああ強調しているんだな」と気づいてもらえば十分です。

が、ひとつ落とし穴があります。たとえば、上の賛美歌三番を「私たちの主の御殿は照り輝きなさい」とか、四番で「主が神でありなさい」とか、十八番で「たぐいがないようにしなさい」という意味だと思つたら誤解。口語が耳になれている私たちにとって間違いやすいのは、「こそ」の結びのこつばを命令の意味にとつてしまうということです。「主の御殿こそ照り輝け」の「照り輝け」は命令形でなく已然形です。ですから正解は強調、つまり、「私たちの主の御殿はすばらしく照り輝くよ。」ということ。同様に、「主こそは神なれ」の「なれ」は已然形で、「こそ」を受けて強調の係り結びですから、「主がほんとうに神だぞ」と言っているのです。また、「そのみ栄えこそげにたぐいなければ」は「そのみ栄えは、まったく類ないものだぞ」というのです。

ややこしい文法論議は忘れてしまっても結構ですが、「こそ」「ぞ」が出てきたら、「これは強調だな」とこれだけは腹に入れておきましょう。

日々主と歩めば

聖歌467

悲しみ尽きざる 憂き世にありても

日々主と歩めば 御国の心地す

ハレルヤ 罪咎消されしわが身は

いづくにありても 御国の心地す

多くの方の愛唱聖歌ではないでしょうか。試みの多い憂き世を歩んでいるときに、私たちの心の目を主イエスに向けてくれる賛美です。

ところで、この文語の歌詞の中で現代人が誤解しがちなところがあります。「日々主と歩めば」です。現代人の語感から言えば、これは「もし日々主と歩むならば、御国の心地がするだろう」という仮定の意味となるでしょう。けれども文語では、「もし日々主とともに歩むなら」という意味を表したいならば、「日々主と歩まば」としなければなりません。

「歩め」は動詞「歩む」の已然形です。「已然形⁺ば」は多くの場合、「くなので」という理由を表します。他方「歩ま」は未然形であり、「未然形⁺ば」は、「もしくなら」という仮定の意味になります。

そうすると、この聖歌の意味はどういうことになるでしょうか。この聖歌は、「悲しみが尽きないつらい世にあっても、もし日々主と歩んだなら、天国の心地がするだろうなあ」と、「山のあなたの空遠く」のような、かなわぬ理想を歌っているではありません。むしろ、「悲しみが尽きない辛い世にあっても、私は日々主とともに歩んでいるので、天国の心地がするのです」と力強く信仰の現実を喜んでいる歌なのです。

「天国ってどんなところですか。蓮の葉っぱにのって一日中ボーっとしているんなら、つまらないなあ」そんなことを言った中学生がいました。天国とはどんなところでしょうか。宗教改革者が言いました。「たとい天国に行っても、もしそこに主がいなければ、私にとってそこは地獄である。かりに地獄に行っても、そこに主がともにいらっしやるなら、私にとってそこは天国である。」

御国とはすなわち、私を愛し私の罪のために十字架にかかったお方、いえ、よみがえった方がともいてくださるところです。ならば、確かに悲しみ尽きないこの世にあっても、「日々主と歩めば、御国の心地す」です。

み使いらの声すなり

讚美歌1111

- 1 神の御子は今宵しも ベツレヘムに生まれたもう
いそぎや友よもろびとに いそぎ行きて捧ますや
- 2 賤の女をば母として 生まれまししみどりごは
まことの神、君の君、 いそぎ行きて捧ますや
- 3 「神にさかえあれかし」と 御使いらの声すなり
地なる人もたたえつつ いそぎ行きて捧ますや
- 4 とこしなえのみことばは 今ぞ人となりたもう
待ち望みし主の民よ、 おのが幸を祝わずや

「いそぎ行きて捧ますや」とは、ベツレヘム郊外の羊飼いたちのクリスマスの夜のことばです。もちろん反語表現になっているわけで、反語表現がかえって強い肯定を意味しています。

「賤の女」ということばは差別用語、あるいは不快表現ということで問題にもなるのでしょうか。けれど、当時のイスラエルの社会においてマリヤは実際、身分の高い女性ではありませんでした。そして、羊飼いたちもまた当時の社会の中ではいい職業とされたのが現実であったそうです。羊飼いは、生き物たちの世話をするというその職業内容からして、法律学者たちがいうようには安息日の律法も守ることができない「呪われた」職業でありました。

御子イエスがマリヤの胎に宿り、羊飼いたちはその誕生の告知がなされたことに意味があるわけです。人が不快になる用語は避けるのは知恵ですが、言葉を入れ替えると福音が意味を失うようなことは避けねばならないでしょう。また、不快用語を使わないだけではありまの世に「不快」な実態がなくなるわけではありま

せん。不快な実態から目をそらすための措置としての、不快用語撤廃にはならぬこともたいせつではないかと思えます。差別用語を無神経に使う人は差別主義者かもしれませんが、差別用語を使わない人が必ずしも差別をしない人ではないでしょう。

「声すなり」ということばの意味。「なり」という助動詞は、断定「である」という意味の場合と伝聞「ようだ」という意味のばあいがあります。どう区別するか。『土佐日記』の有名な序に「をとこもすなるにきといふものををんなもしてみむとてするなり」とあります。意味は「男もする」という日記というものを女である私もしてみようと思っているのです」ということです。つまり、「すなり」（終止形＋なり）は「する」というと伝聞の意味になり、「するなり」（連体形＋なり）は「するのだ」と断定です。ですから、第三節の『神にさかえあれかし』と御使いらの声すなり」というのは、直接見て聞いているのではなくて、「御使いたちの声がしているようだなあ」と、どうも家の中から天からの響きに耳をそばだてているという感じですが。

もろびとごぞりての謎

讚美歌 112

この賛美を聞くと、幼稚園を思い出します。木枯らし吹き始めた園庭をスキップしながら、「モロビトゴゾリテムカエマツレ！」と心ウキウキ歌

ったものです。けれども、幼心にとってこの賛美ほど謎に満ちた呪文はないのでした。「モロビト」「コゾリテ」「ムカエマツレ」・・・何一つわかりません。そして極めつけは、「シュワキマセリ、シュワキマセリ」。心にウルトラマンの「シュワツチ」をイメージしていました。

これほどポピュラーでこれほど分かりにくい表現の満載された賛美歌も珍しいかもしれません。「モロビト」や「コゾリテ」は大人になるにつれてだんだんとわかってきたのですが、数年前にやっと本当の意味のわかったことが、第二節の「悪魔のひとやを打ち砕きて・・・」の意味でした。はずかしながら、私はかつて二節を歌うたびに、勇ましいイエス様が悪魔が放った一本の矢を目にも留まらぬ早わざでつかみ取る と、ボキッとへし折っている場面を思い浮かべていました。そして、数人の人に聞いてみると、なんとみんな同じことを考えていたのでした（ああ仲間がいてよかった？）。

『宇治拾遺物語』に前科七犯の男が「ひとやに七度ぞ入りたりける。」とあります。「ひとや」は人屋つまり牢獄のことなのでした。これがわかると、「とりこを放つと」もよくわかります。イエス様は悪魔の牢獄を打ち砕いて、捕らわれの身だった私たちを、解放してくださいました。それにしても、「もろびとこぞりて」を歌うたびに幼い日から親しんできたことゆえの捨て難さを感じつつも、「わからんことばで歌うことが、ほんとうに神様の御心になかったことなのだろうか。」と思うのです。

初めのクリスマスに御子イエスの誕生のしらせを受けたのは荒野にいた卑しい羊飼い。もし、あの夜、御使いたちが「もろびとこぞりてむかえまつれ！・・・シュワキマセリ！」と告げたなら、きっと羊飼いたちは「天使の異言で話されてもわかりません。」と言ったでしょう。

そこで、普通のことばの112番。
1. みなさん集まれ 主は来られた
久しく待ってた 主は来られた
2. 悪魔の牢屋を 打ち砕いて
とりこを放つと 主は来られた
ウーン、あまりピンと来ないなあ。

「この人を見よ」

讚美歌 121

1 馬槽の中に 産声上げ
匠の家に 人と成りて
貧しき憂い 生くる悩み
つぶさになめしこの人を見よ

2 食する暇もうち忘れて
しいたげられし人を訪ね
友なき者の 友となりて
心砕きしこの人を見よ

3 すべての物を 与えし末

死のほか何も報いられて

十字架の上に 上げられつつ

敵を赦ししこの人を見よ

4 この人を見よこの人にぞ

こよなき愛は 現れたる

この人を見よこの人こそ

人となりたる 生ける神なれ

讚美歌 121 番を歌うと二つの人を思い出します。ひとつは、この作詞者由木康師のことです。

『讚美歌略解』に次のようにあります。「この曲は、彼が近代神学の影響を受け、イエス・キリストの神性について思い悩んだ結果、キリストの神性は人性のうちに包まれ、輝いているという確信に達した」。この讚美歌はその確信と喜びを歌ったものです。人間理性で納得できないことはなにもありえないという色眼鏡で福音書を読んだ「近代神学」は、イエスの神性を否定して、単なる愛の教師だと教えていました。しかし、馬舟の赤ん坊の「この人を見よ！」、友なき者の友とられた「この人を見よ！」、十字架で敵をゆるした「この人を見よ！」と五回も力強く繰り返されるフレーズは、真の人であられるナザレのイエスの生涯を見つめ続けて、そこに尊い真の神のご栄光が輝き出ていることに目覚めた由木師の感動が見事に表現されています。

私たちは実は、ほんとうの意味で人ではありません

せん。悲しむべきときに喜び、喜ぶべきときに悲しみ、怒るべきときに平然とし、忍耐すべきときに怒り出すような墮落したアダムの子らです。けれども、ただ一人、真実なお方がいました。悲しむべきときに悲しみ、喜ぶべきときに喜び、怒るべきときに怒られた、ただ一人の真実なお方。真の人となられた真の神、イエス・キリストです。

「この人にぞ、こよなき愛は現れたる。この人こそ、人となりたる生ける神なれ。」と二度の係り結びによる強調が、神人なるイエスに対する賛美として生きています。

【追記】

実は、私は長年この曲のとくに2節を歌うたびに、宮沢賢治の「雨ニモ負ケズ」を思い出していました。けれども、賢治は熱心な日蓮宗の信者ですから、おおつばらに口に出して言うのも気が引ける思いがしていたのです。

「雨ニモマケズ

風ニモマケズ

雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ

丈夫ナカラダヲモチ

(中略)

野原ノ松ノ林ノ蔭ノ

小サナ萱ヅキノ小屋ニキテ

東ニ病氣ノコドモアレバ

行ツテ看病シテヤリ

西ニツカレタ母アレバ

行ツテソノ稲ノ束ヲ負ヒ

南ニ死ニサウナ人アレバ

行ッテコハガラナクテモイ、トイヒ

北ニケンクワヤソシヨウガアレバ

ツマラナイカラヤメロトイヒ

(中略)

ミンナニデクノボートヨバレ

ホメラレモセズ

クニモサレズ

サウイフモノニ

ワタシハナリタイ」

ところが数年前、これは賢治自身のことではなく、賢治が尊敬していたひとりのキリスト者を描写したことであるということを知りました。内

村鑑三のもっとも忠実な弟子の一人であった斎藤

宗次郎 (1877-1968年) です。宗次郎は岩手県

花巻の生まれで宮沢賢治と同郷の人です。彼は曹

洞宗の僧侶の家に生まれで教員となっていました

がキリスト者となります。内村の影響を受けてい

た宗次郎は内村の影響を受けて非戦論を唱えたこ

とによって、教育界から追放されてしまいます。

そこで、内村の勧めもあって、彼は花巻で新聞取

次という仕事をするようになるのですが、宗次郎

は祈りの生活の中で新聞取次をします。雨の日も

風の日も吹雪の日も、十メートル行つて配達して

は神に祈り、十メートル行つては神に祈りながら

新聞配達をし、また病の人がいれば側にいて慰め

の言葉をかけたりもしました。一日平均四十キロ

市内を走り回って配達をしたそうです。賢治はこ

の宗次郎と交流があり、「サウイウモノニ ワタシ

ハナリタイ」と言ったのでした。

だとすると、私が讚美歌 121 番に「雨ニモ負ケ

ズ」を思い浮かべたのもあながち的外れではなかつたことになりました。賢治が尊敬し「サウイウモノ」は、キリストの足跡にわが足を重ねて生きていたキリスト者斎藤宗次郎その人であったからです。

驚くばかりの恵み

聖歌 229

驚くばかりの恵みなりき

この身の汚れを知れる我に

作者ジョン・ニュートン (1725-1807) は、もと奴隷商人で後に牧師となった人で、英国の霊的覚醒運動の指導者の一人です。私はかつてこの一節を歌うごとに、ニュートンは奴隷商人をしながら良心の呵責にたえかねて回心に至ったのだろうと想像していました。

ところが、自伝『ジョン・ニュートンの手紙』を読んでみると、真相はそうではないようです。

彼は言います、「私は奴隷売買に従事している間、それは合法的なことであるとして、少しも良心の呵責を感じませんでした。それが摂理によって与えられた職業であると考え、完全に満足していたのです。事実、世間では奴隷売買は収益をもたらす上品な職業であると考えられていました。」彼は回心後もしばらくは良心の呵責なく奴隷商人

をしていたのです。私は少なからずショックを受
けました。どこかで聞いた「宗教者はしばしば良
心を悩ます小さな罪には敏感だけれど、大きな社
会的罪については鈍感なのだ」という非難の言葉
が頭の中を行きめぐりました。けれども、現代
の視点からニュートンを指さし非難することはた
やすいことでしょうが、社会全体がその罪に染ま
り来っており、その罪のなかで生まれ育つなら
ば、罪が罪であると気がつくことはどれほど困難
で しょうか。肥だめに生まれ育つたうじ虫が、
汚物こそスイートホームでありディナーであると
思っているのと同様に。

そういう自分の過去をありのままに告白しだか
らこそ、「驚くばかりの恵みだった」と歌うのがニ
ュートンなのでしょう。きつと私たちも、主の御
許に召された日には我が身を振り返って、赤面し
ながら「驚くばかりの恵みなりき！」と賛美しな
いではいられないに違いありません。二十世紀末
の日本で世間が上品なことと思こんでいること
のうちに は、本当はとてつもなく罪深い汚らし
いことがあるかもしれません。

一方、ニュートンらの霊的覚醒運動の中、回心
したウィルバーフォース(1759-1833)は奴隷制度
の罪深さに目覚め、奴隷廃止運動の闘士となりま
す。植民地地主たちの猛烈な反対にも屈すること
なく戦い抜き、ついに 1807年英国で奴隷
貿易廃止法が可決されました。奇しくもジョン・
ニュートンが天に召されたその年でした。

いもせをちぎる

讚美歌430

いもせをちぎる 家のうち
わが主もともにいたまいて
父なる神の 御旨に成れる
祝いのむしろ 祝しませ

今し御前に立ち並び

結ぶちぎりは かわらじな

八千代もともに、助けいそしみ

まこころ尽くし、主に仕えん

愛のいしずえかたく据え、

平和の柱 なおく立て、

神のみ恵み 常に覆えば、

幸い家の 絶えざらん。

結婚式で元気一番の賛美といえは、この430
番でしょう。けれども、ことばの上では私のよう
な若者にとつては難解なものが次々にできます。
まず「いもせをちぎる」というとなんだか芋の
つるをちぎり取る光景が目には浮かびますが、そう
ではありません。「いもせ」は「妹背」、万葉的な

讃美歌 65

表現で「夫婦」です。「ちぎる」といっても、二人をちぎって別れさせてはいけません。「契る」、契約するのです。次に「祝いのむしろ祝しませ」とはなんでしょう。「むしろ」はあのゴワゴワしたわたらの敷物ものことでしょう。その上に、みんなです座って結婚のお祝いをするという情景でしょうか。ちよつと現代の椅子の結婚式、あるいは立食の披露宴とは遠いものがあります。「祝しませ」というのは「祝福してください」と「我が主」イエス様にお願ひしているのです。「ませ」は「ます」の命令形です。

二節。「今し御前に」の「し」は強めの副助詞で「今まさに」ということです。「結ぶ契りは変わらじな」というのは「結ぶ契約は変わるまいね」ということ。

三節。「神のみ恵み、常に覆えば」とあります。この欄で取り上げた賛美歌の中で、何度か出てきましたが、「覆わば」でなく「覆えば」とあるところがポイント。もし「覆わば」だと不安げな結婚の歌となり、「覆えば」となると確信に満ちた結婚の歌となります。つまり、「覆わば」はハ未然形プラスばVで「もし覆うならば」となり、「覆えば」だとハ已然形プラスばVで「覆うので」となります。若いふたりの新家庭の上には、神様の恵みが覆うので幸いが家に絶えないのです。

聖なる聖なる聖なる

聖なる、聖なる、聖なるかな
三つにいまして一つなる
神の御名をば 朝またき
起き出でてこそほめまつれ
(讃美歌 65番)
聖なるかな 全能の神
我ら朝またきほめまつる
三つにましてひとりの神
愛に満つる強き主を

『讃美歌』、『聖歌』のいずれにも訳されている英国の讃美歌作家レジナルド・ヒーバーの賛美歌です。もともとは三位一体聖日ペンテコステ直後の主日、今年6月6日のために指定されて歌われたそうです。内容は黙示録4章8節から11節がパラフレーズされたものとなっていますので、聖書と対照しながら歌ってみてください。

ところで、『讃美歌』では「聖なる聖なる聖なるかな」となっているところが、『聖歌』では「聖なるかな全能の神」となっています。原作では Holy, Holy, Holy, Lord Almighty となっているので『讃美歌』は「ホーリー」の三度の繰り返しを重んじて、『聖歌』はオールマイティを入れることに苦労されたよう

讚美歌 267

です。

ところで、この賛美歌は最初に申しましたように三位一体聖日の賛美という明確な意図をもって作られたものです。なのでそのために、『黙示録』の件の箇所がパラフレーズされるかたちで賛美歌とされているかというところ、御座に仕えるケルビムの「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」という三度の繰り返しの賛美が父・子・聖霊の三位に向けられているという信仰的解釈が、作者ヒーバーにあつたからであるうと思われます。もちろんこの繰り返しだけから三位一体を読み取るというところ、根拠は薄いと言われて一蹴する向きもあるでしょうし、それも理屈としてはかなっているでしょうが・・・。

そういえば預言者イザヤの再召命の事件のあるイザヤ書6章でもやはり、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」と天使セラファイムたちが賛美をしています。

ともかく私自身としては、「聖なる、聖なる、聖なるかな！」と歌ったほうが、三位一体聖日の賛美だなあとという感動を覚えながら歌うことができるというところが、率直な感想ではあります。

わが妻子も

1 神はわがやぐらわが強き盾
苦しめるとき近き助けぞ
おのが力おのが知恵をたのみとせる
陰府の長もなおそるべき

2 いかにも強くともいかでか頼まん
やがては朽つべき人の力を
われと共に戦いたもうイエス君こそ
万軍の主なる天つ大神

3 悪魔 世に満ちてよし脅すとも
神の真理こそわがうちにあれ
陰府の長よほえ猛りて迫り来とも
主のさばきは汝がうえにあり

4 暗きの力のよし防ぐとも
主のみことばこそ進みにすすめ
わが命もわが宝もとらばとりね
神の国はなおわれにあり

この賛美歌を詩人ハイネは「宗教改革のラ・マルセイエーズ」と名づけたそうです。墮落しきつた当時のローマ教皇を「陰府の長」に見立てて、会衆が声合わせて勇ましく歌うこの賛美歌は、「聖書のみ」「恩寵のみ」「信仰のみ」という旗を掲げた改革者ルターの雄たけびです。

「おのが力おのが知恵をたのみとせる陰府の長」とか「いかに強くともいかでか頼まん やがては

朽つべき人の力を」といった歌詞には、神人協力説を唱える教皇庁に対して、ただ神の恵みのみで、信仰によって義とされたという「恩寵のみ」の原理がうかがえます。

また、「神の真理(まこと)こそわがうちにあれ」「主のみことばこそ進みに進め」という係り結びによる強調によって、聖書の真理をないがしろにするローマの「伝統」に対して、「聖書のみ」という原理が高らかに謳われていることがわかるでしょう。

言い回しでわかりにくいかもしれないのは、「よし」とも「よし脅すとも」は「かりに脅すとしても」の意味です。

ところで、この賛美歌は歌詞改訂で話題になりました。四節「わが宝も取らば取りね」とあるのは、もともと「わが妻子 (Kind und Weib) も取らば取りね」でした。「ね」は確述の助動詞「ぬ」の命令形です。「もし取るなら取っちまえ」です。これは妻子を夫の所有とする封建制の名残という批判があったからでしょうか、「宝」に置き換えられました。けれども、聖職者不妻帯という異教的禁欲賛美の制度に対して、聖書の教えに立ち返って結婚を尊重し、自ら妻帯に踏み切ったルターなればこそ、「わが妻子も」です。彼は言いました。「私は妻ケーテを、フランス王国やベニスの主権よりも尊いと思う。」当時ヨーロッパでもっとも栄えていた王国フランスの王となることより、巨億の富のうなるベニスの主になることよりも、ルターは妻ケーテを愛しました。ルターにとって至宝である妻子であるからこそ、「取らば取りね」に重

みがあります。ちなみに聖歌 233 番ではもとの歌詞のとおり「妻も子らも」と訳されています。

十字架のもとぞ

讚美歌 262

十字架のもとぞいとやすけき

神の義と愛の 会えるところ

嵐吹くきの 巖の陰

荒野の中なる わが隠れ家

2 十字架の上に われはあおぐ

わがため悩める神の御子を

妙にも尊き 神の愛よ

底いも知られぬ人の罪よ

この歌ほど十字架の主イエスの姿とその奥義を鮮明に、そして切々と歌う賛美歌をほかに知りません。

「十字架のもとぞいとやすけき」の「ぞーやすけき」は、強調の係り結び。ほかの場所には平安はない。ただ十字架の下だけが平安の場なのだと言説します。神は義なるお方です。神の激しい御怒りの雷鳴の下に、罪人はおののき、おじ惑うばかりです。しかし、御子は私たちを御怒りから救うために、聖なる避雷針となってくださいました。神の怒りは私たちにではなく、十字架の御子イエスに激しくくだりました。ただ十字架の下だけが

平安なのです。

「十字架の上にはわれはあおぐ、わがため悩める神の御子を」の理解の鍵は「悩める」の「る」という助動詞にこめられた臨場感です。「る」は存続の助動詞「り」の連体形ですから、「わたしのために悩んでいる神の御子」という意味です。心の目は、今まさにカルヴァリーの丘の上で苦しみあえていでいる神の御子を見えています。主イエスを十字架に釘づけるために槌を振り下ろしたのは、私の手。主イエスに唾を吐きかけ、こぶしを振り上げたのは私。そして御子が「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」と祈られるのは、この私のためなのだという思いが胸に迫ります。

十字架の主イエスを仰ぐとき、私たちが見るものは何でしょうか。御子を棄ててまで罪人を愛される不思議な神の愛と、底しれず深い人の罪です。

「妙にも尊き 神の愛よ
底いも知られぬ人の罪よ」

近年、十字架の福音が見捨てられている観があることを、私は悲しんでいます。人の罪が語られず、人の価値ばかりが語られ、神の義が語られず、観音様の無限抱擁の愛ばかりが語られるなら、十字架のことは無用になったのでしょうか。ああ、主はだれのために、何のためにカルバリーで血を流されたのでしょうか。

雨と涙と

讚美歌 128

1 緑のしたたるベタニヤ村に
注がせたまいし情けの雨は
潤れし心を今もつるおす

3 いまわのきわにもベタニヤ村の
ゆかしきそのかみ 偲ばせたまえ
尽きぬ望みは 主イエスにあれば

4 ラザロの墓なる 主の涙こそ
千代にもたえせぬ 愛のかたみか
主はいのちなりよみがえりなり

英訳聖書で最短の節は、ヨハネ福音書 11 章 5

節「イエスは涙を流された(Jesus wept)」のだと聞いたことがあります。愛するラザロの死に際して、主が流された涙です。

主イエスが「愛しておられた者」というからには、ラザロは何か秀でたところがあつたのかと想像したくなるものですが、聖書はラザロの言葉も業績についても一言も語りません。ただ、彼は主に愛されていた、それだけが彼の美点です。その「かたみ(証)」が主の涙でした。

「注がせたまいし情けの雨」の「せ・たまいは、「せ」と「たまひ」はともに尊敬の助動詞で最高敬語であり、もったいなくも主イエスがラザロのためにお注ぎになった涙を意味しています。一方、 ∞ 節の「ゆかしきそのかみ 偲ばせたまえ」の「せ・たまえ」は、使役と尊敬で、「私たちに偲ばせてください」という意味です。

「情けの雨」とはなんででしょう。「ああああ、長崎はきょうも雨だった」と歌う人の心にも雨が降るように、雨は∞節の縁語です。ベタニヤ村に降る雨は、主イエスの涙をさしています。情景が一致しているのです。

3節では、「私も死に直面するとき、ベタニヤ村でのこの故事を思い出したい」と歌っています。「ゆかし」とは、見たい、知りたいと心ひかれることです。「おくゆかしい」という言葉は現代ではエレガントくらいの意味にしか使いませんが、本来、「おく」は心を意味して、「おくゆかしい人」といえば、その心の深みを知りたいと思わせるような人柄のことです。「そのかみ」とは「その昔」の意ですから、「ベタニヤ村のゆかしきそのかみ」とは、私もその場において見たかったと心ひかれる、ベタニヤ村での主イエスの落涙の故事」という意味です。

あなたの死の日にも、主はあの涙を流してください。さるでしょう、きつと。

【付録】

主は強ければ

讚美歌 4 6 1

1. 母音 e + ば 〓 〓 なの (確定条件) または 〓 〓 〓 〓 〓 〓 (恒常条件)

高校の古文の時間には、「未然形 + ば」は仮定条件で「もし〓ならば」という意味であり、「已然形 + ば」は確定条件で「〓なの」あるいは恒常条件「〓するいつも」という意味であると習います。でも、「ば」に先立つそれぞれの語の活用形が未然形か已然形かを知らなければならぬので、ちよつとやつかいです。そこで、ここではほとんどのばあいには通用する、かんたんに見分け方を紹介します。

それは、文語のほとんどの場合、「ば」の直前のことばの母音が e であれば、「〓なの」という意味になるということです。これは讚美歌で多用されています。

「〓なの (確定条件) の例」

新聖歌 5、聖歌 180 「あがなわれたれば」 ↓ あがなわれたのだから

新聖歌 7、讚美歌 7 「主のいませば やすけし」

↓ 主がいらつしやるので平安だ

新聖歌 8、讚美歌 5 「あがない主によりて祈れば」

↓ あがない主によって祈るので

新聖歌 14、聖歌 84 「いと大いなれば」 ↓ たいへん偉大だから

新聖歌 22、聖歌 85 「み神はわれらの父親なれば」 ↓ 神様は私たちの父親なのだから

新聖歌 45、讚美歌 515 「十字架の血にきよめぬれば」 ↓ 十字架の血できよめてしまったのだから

「ぬれ」は確述助動詞「ぬ」の已然形

新聖歌 34、聖歌 421 「主よ今 御顔を仰ぎ見

れば」↓主よ今 御顔を仰ぎ見るので

新聖歌325、聖325 「十字架のみもとに 荷を降ろせば」↓十字架の下に荷を降ろすので

新聖歌505、讃461 「主われを愛す 主は強ければ・・・」↓主は私を愛する。主は強いので：

「〜といつも（恒常条件）の例」

新聖歌28、讃美93 「御神の恵みを思いみれば」
↓神様の恵みを思いみるといつも

このように「e+ば」はほとんど、「〜なので」「〜だから」という意味です。この文語文法を心得ているだけで、ずいぶん賛美歌の味わいに違いがでできます。

2. 母音 a +ば Ⅱもし〜ならば（仮定条件）

新聖歌24、聖歌479 「御国に帰りなば」↓もし御国に確かに帰ったならば（「な」は確述助動詞「ぬ」の未然形）

新聖歌27、讃美歌23 「人を愛して己に勝たば」
↓もし人を愛して己に勝つならば

3. 例外

新聖歌27 讃美歌23 「神にささげば」は、「e+ば」ですが、「神にささげるならば」という意味です。これは「ささぐ」という下二段活動詞の未然形が「ささげ」で、「未然形+ば」の仮定条件で

あるからです。もし「ささげるので」という意味ならば、「ささぐ」の已然形は「ささぐれ」ですから、「ささぐれば」となります。

もうひとつ例外は新聖歌503、賛美歌429 「愛の御神よ」です。「玉敷く庭も愛の露のうるおはなくば、など安からん」は、「もしうるおいがなければ」という意味です。「なし」という形容詞の未然形が「なく」であるので、「なくば」は「未然形+ば」の仮定条件であるわけです。

少しばかり例外はあるものの、おおよそ「e+ばⅡ〜なので」というのを覚えていくといいです。

感謝するの？しないの？

「ああ 感謝せん」という歌がありますが、「ああ感謝しない」って思っている人はほとんどいないでしょう。「ああ感謝しない。ああ感謝しない。」では歌う意味がありません。では、「ん」はなんでしょうか。高校教科書では推量の助動詞は「む」と教えられますが、実際にはしばしば「ん」と表記されます。ですから、「ああ 感謝せん」は、「ああ感謝しよう」という意味になるわけです。同じ例はほかにもたくさんあります。讃美歌6 「来る日ごとほめ歌わん」↓「来る日ごとほめ歌おう」です。「来る日ごとほめうたわない」では賛美になりませんからね。

新聖歌89、聖歌392にもあります。「罪ゆるさ

んために 我にかわり イエスキミ十字架に死に
たまえり」の「ん」は意志の助動詞「ん(む)」の
連体形です。ですから、「罪ゆるさんために」は「罪
をゆるそうということのために」という意味です。

現代人が誤解するのは、「ん」という助動詞の意
味が、古語と現代語でさかさまになってしまっ
ているからです。古語では「ん(む)」は推量・意志
の助動詞なのですが、現代語で「ん」は打消しの
助動詞としてしばしば用いられます。たとえば、
古語で「われ飯を食わん」というと「私は飯を食
べよう」という意味ですが、現代語で「おれ昼飯
は食わん」と言ったら、「おれは昼飯は食べない」
ということになります。では、なぜ現代語で「ん」
は打消しの助動詞になってしまったのでしょうか。
それはおそらく打ち消しの助動詞「ず」の連体形
「ぬ」と混同したのだらうと思います。「飯を食わ
ぬ(人)」↓「飯をくわぬ」↓「飯を食わん」。(専
門家の方の御意見あれば、いただきましたし。)